

## 概要 ヴォルガ旅行－2009 年中流域－

2009 年 9 月 10 日、新学術領域研究「比較地域大国論：地域大国の文化的求心力と遠心力」ならびに、科研基盤研究 A「ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究」のメンバーは、モスクワへ飛び立った。目指すはヴォルガ中流域の諸都市、向かうところはひとつ、その思いは様々。ヴォルガ地域の専門家と、比較地域大国論の研究者と一緒にヴォルガ中流域に行つて、どんなことをしたら有意義な旅行になるのか、さまざまに企画を練つたが、答えはなかなか出てこなかった。

旅行に参加した先生方、諸兄諸姉がそれぞれご専門とご自分の関心に沿つたテーマで今回の旅行の体験を生かした文章を書かれることと思う。拙文は、旅行のあらまし、われわれの活動、現地の人々との交流などについて、薄れゆくディテールを記憶にとどめるための覚書である。つまり、学術的な記録や得られた知見を記したエッセイではなく、一学生(兼にわか添乗員)の単なる旅日記のようなものとしてご笑覧いただければ幸いである。

成田からモスクワに向かう飛行機の中で、座席のひじ掛けに不審な穴が開いていた話や、器が溶けて焦げたご飯とくつついた機内食の話を紹介しても仕方がないので、われわれが活動を始めた日、11 日の朝から書き起こしていこうと思う。

9 月 11 日（金）晴れ

旅行の初日はさわやかな秋晴れに恵まれた。昨日モスクワへやってきた、ペテルブルグに留学中の井上岳彦君、左近幸村君に加え、この朝、モスクワ教育学アカデミーのボリス・ラーニン教授と、カザンに留学中の桜間瑛君が、日本からの参加者 10 名に合流。資金の両替を終えて、出発したところ、さっそく 2 名を置き去りにしたことが判明する。集団旅行に慣れない者が、にわか添乗員を勤めたことのボロがさっそく露呈する。無事兩名を見つけ出し、気を取り直して、再び一路、ウラジーミルへ。



「車内風景」

モスクワからウラジーミルに通じる街道は M7、その名も「ヴォルガ」。かつてはシベ

リアに囚人を送るための街道でもあった。現在はモスクワとカザンを結ぶ 1342 kmの幹線道路である。クリヤジマ川を越えて、ウラジーミルまで約 170 キロ強の旅は快適で、昼ごろにはホテルに到着した。ホテルで我々を出迎えてくれたのは、ウラジーミル大学の哲学・宗教学研究室室長のエヴゲーニー・アリーニン教授。さっそく大学でレセプションがあるということで、チェックインを済ませた我々は、ウラジーミル大学へ。

現在のロシアの多くの地方の国立大学が、高等師範学校を前身とするのに対し、国立ウラジーミル大学は、1958年に創設された総合技術専門学校を前身とする。そのため、現在でも理系の学部が強いという。レセプションでは、総長はじめ副学長ほか、そうそうたる面々が我々を迎えてくれた。さらには、ジャーナリスト学科の実習という自前の「プレス」までついていた。



「レセプション風景」



この盛大なレセプションのあと、「普通」と勧められて予約してしまったホテルの食堂「キャバレー コウモリ」で怪しげな昼食をすますと、ウラジーミルの歴史と宗教を専門とする若手研究者イヴァン・ビクーロフ君が、旧市街を案内してくれた。ウラジー

ミルの旧市街は、クリヤジマ川の岸辺の高台にあり、2008年に建てられたウラジーミル聖公の記念碑の建つ広場からは、川と市の南方が一望できる。1992年にユネスコ世界遺産に登録された、12世紀の城壁の遺構「黄金の門」、イコン画家アンドレイ・ルブリョフの『最後の審判』が残る「ウスペンスキー聖堂」、旧約聖書のモチーフが刻み込まれた「ドミトリエフスキー聖堂」などを見学。レセプションが盛り上がり、市街を訪れた時間が遅かったため、建物の内部を見学することはできなかったが、この日が洗礼者ヨハネ祭だったこともあり、ウスペンスキー聖堂では野外でのミサを見ることができた。また、イヴァン君の説明で、いまだにプラネタリウムとして使われている教会や、20-30年代に銃殺された人々の遺骨が出てきた生神女誕生（ロジェストヴェンスキー）修道院の一角など、ソ連時代の名残も見ることができた。



「クリヤジマ川を望むウラジーミル聖公像」

夜はアリーニン教授とイワン君も交え、気づくと隣のテーブルのにぎやかなウラジーミルっ子たちにも交えられ、心躍る楽しい交流の時間となった。



「ついでに体も踊る」

9月12日（土）晴れ

ウラジーミルの2日目。午前はロシア・インド友好協会という肩書を任ずる、ハーレ・クリシュナ信者たちのところへお邪魔した。ここの代表の一人で、ウラジーミル大学で東洋哲学を教えているアレクセイ・ティモシユーク准教授が我々を案内してくれた。クリシュナ信者の若者たちは早速歌や踊りで我々を歓迎。ロシアにおけるインド文化やインド音楽の人気、彼らがクリシュナに興味を持った個人的な経緯などの話も語ってくれた。クリシュナ信仰は1960年代からNYを中心にヒッピーたちに広まった新興宗教で、その創設者は1971年にロシアを訪問している。ロシアでの宗教活動が始まったのは89年からで、現在では125の寺院があり、全国で30万の信者がいる（ただしモスクワに70-80の寺院と25万人の信者が集中）との話であった。新興宗教に対する政治的な不信もあって、彼らが現在生活している建物も市当局に回収されるとか、されないとか。一方、集まった信者たちは始終楽しそうで、「ハレ、ハーレー、クリシュナ、クリーシュナー」とマントラを歌い踊りながら、われわれを送り出してくれた。



午後からはウラジーミル近郊の町、スズダリへ。スズダリを案内してくれたのは、地元のガイドさん、スヴェータ。スズダリは11世紀初頭に歴史書にあらわれるロシアの古い町で、北東ルーシの諸公の一人、ロストフ・スズダリ公国のユーリー・ドルゴルーキー公によって首都となった地である。スズダリは諸侯間の闘争、ヴォルガ・ブルガール人やモンゴル・タタールの襲来など、さまざまな危機を経験しながら発展した町であり、また宗教的な中心地でもあった。現在では、キュウリやサクランボが名産の人口1万2千人ほどの小都市だが、1967年にツーリズム・センターに指定されて以来、観光業やインフラが整備されて、観光は町の主要産業の一つである。



「スズダリ遠景」

我々一行は、まず、博物館になっているスパソ・エフィミエフスキー修道院へ。修道院の内部には、菜園や花畑、教会堂を利用した教会芸術の展示室、鐘の実演が定期的に行われる鐘楼がある。この修道院は高台にあるため、スズダリの町とそれを取り巻くように流れるカーメンカ川が一望できる。そのあと、クレムリン、生神女誕生聖堂、木造建築博物館などを見学して回った。木造建築博物館には、キジー島の救世主顕栄（プレオブラジェンスキー）聖堂を思わせるような多塔式の教会、木造農家や納屋、風車などが公園内に展示されている。民衆版画（ルボーク）や木製の遊具など、19世紀ごろのこの地域のロシア

農村を再現したような景観を演出している。



「木造建築博物館」

ガイドのスヴェータは、予定の見学時間を大幅にオーバーしたわれわれに文句ひとつ言わずお付き合いしてくれた。彼女はフランス語でのガイドもするようで、外国人にはよくなれている。日本人の観光客グループもほぼ毎日のようにあるようだ。しかし、その割に町の中や博物館展示の案内はロシア語ばかりで、インドや中国のようにお土産の売り子が奇妙な言葉で話しかけてくることもほとんどない。外国人ばかりの国際観光都市を、スキンヘッドの2人組がうろついていた。商売気がないのか、(ロシア中いたるところでそういうものと思われる)似たようなお土産を売るおじちゃんやおばちゃんたちの中、特にいろいろ勧めてくるのが、自分の作った農産物を売るおばちゃんたちだ。名産のキュウリの塩漬けや、赤フサスグリ、旬のリンゴなどを堪能し、スズダリ見学を終えた。

9月13日(日)曇り時々晴れ

朝、やや曇り空の中、ウラジーミル近郊の町、ボゴリューボヴァへ向かう。ここは、ドルゴルーキー公の長子でポロヴェツ人のハンの娘を母に持つ、アンドレイ・ボゴリュープスキーが居城をかまえた場所である。現在は極右の修道院長とスキャンダルで有名な女子修道院と、ロシア建築の白鳥と称えられる美しいポクロフ教会がネルリ川の河畔に建っている。ボゴリュープスキー修道院は、この地へやってきた公の前に、聖母マリアが現れたことを記念して、1158年に建造された。しかしボゴリュープスキー公は1174年、この修道院で陰謀によって殺害される。その建物の一部が生神女誕生聖堂に残っていて、修道院の一角は展示室になっている。



「奥の色が変わっている部分が 12 世紀

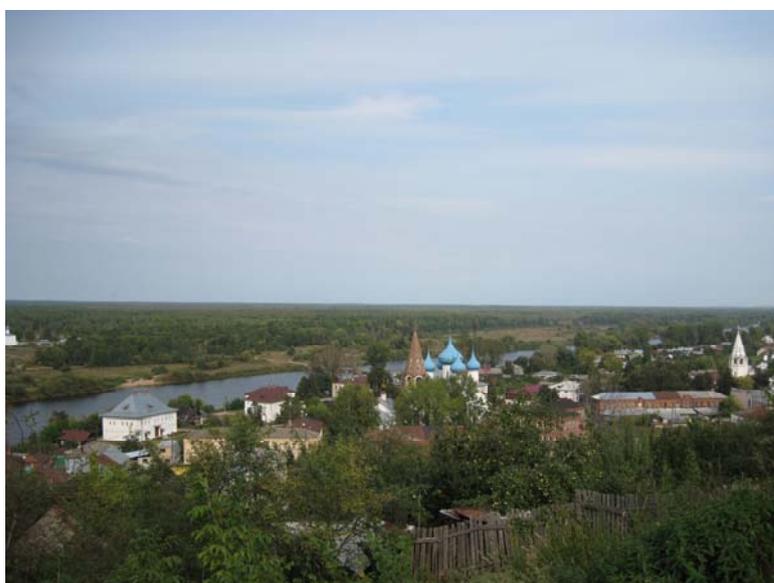
の建造物」

一方、ポクロフ教会はブルガールに対する勝利を祝して、1165 年に建てられた。その白亜の石は、カザンから運ばれたものだという伝説がある。現在は、ウラジーミル近辺の大観光地であるが、教会としても機能していて、年に数回ミサが開かれるということだ。昼間は観光客で賑わう道も、朝方はヤギがのんびりと散歩していた。



散歩を終えて、モスクワへ帰るラーニンさんとウラジーミルの駅でお別れ。新たにアリーニンさんと、これまたウラジーミル大学で准教授を勤める歴史家のセルゲイ・ミーニン神父にガイドをお願いして、われわれは街道「ヴォルガ」をさらに東へ。昼過ぎには天気も回復した。向かう先はウラジーミルから 143 キロ東方、ゴロホヴェツという人口 1 万 3 千人の小さな町。クリャジマの河岸に位置する。ミーニン神父は 80 年代の末に 3 年間ほどこの町のカザン教会でお勤めしていたということで、頼もしいガイドであった。

ゴロホヴェツの西 80 キロにはニジニ・ノヴゴロドという一大商業都市が位置し、これとモスクワを結ぶ河川貿易によって、17 世紀末ごろから 18 世紀初頭まで、町は急速に発展した。しかしその後、河川貿易がすたれ、鉄道が走るとゴロホヴェツはすっかり忘れられてしまった。そういうわけで、ゴロホヴェツは 17-18 世紀の町並みが、今もそれほど変わらないままに残る、ロシアでほとんど唯一の町となった。われわれがまず向かったのは、クリャジマ川に面する高台にそびえるニコリスキー男子修道院。川向うは湿地帯ということで、一面の森がずっと先の地平線まで見渡せた。修道院では、修道士さんが出てきて、鐘楼に登らせてもらった。この建物も 17 世紀のものということで、狭くて急な石造りの階段を上ると、街が一望できた。この修道士さん、アマチュアの写真家ということで、帰りには作品をお土産としてめいめいいただいた。



「クリャジマ川を望む」

この後、川向うのズナーメンスキー女子修道院へ。ニコライ神父はここで昼食をとれるように修道院長マートシュカ・ライーサとお話をつけてくださっていた。ライーサさんはウクライナ出身。元気いっぱいの肝っ玉母ちゃんよろしく修道院の一切を切り盛りしている。まだ 10 代後半から 20 代と思しきとても若く控えめな修道女たちが、世話をしてくれた食卓には、自家製のパン、チーズ、スメタナ (サワークリーム)、野菜がふんだんに並び、冷製スープやカッテージ・チーズとジャガイモの料理、魚料理と食べきれないほどのごちそうが次から次へと、ライーサさんの命令に従って出てきた。ライーサ母さん曰く「わたしの命令を聞けない人がわたしは大きらい」というわけで、われわれもはちきれんばかりに食べることを命ぜられた。さらには手製のリンゴジュース、2 種類のボリューム満点のケーキも出された。



修道院長ライーサとニコライ神父

食事の後には、件の若い修道女「うちのマトリョーシカたち」が、聖歌を披露してくれた。その後、修道院の聖堂、ご自慢の菜園や花畑を回りながら、その歴史や現在の暮らしぶりについてのお話を聞いた。修復作業は、自分たちの手で行っているという。冬には渡河か不可能になるこの場所には、食糧の大量の備蓄がある。「ちょっぴり」作ったリンゴジュースは 600 リットル。ジャガイモの備蓄は 3~4 年分。これだけ小さな町のそのまた町はずれに、驚くほど豊かな修道院経営がなされているのは、ライーサ修道院長の手腕なのだろう。お別れには、大量のパン、カッタージ・チーズ、土付きの巨大な人参、イコンとパンフレットをいただき、聖歌『ムノーガヤ・レータ』を歌いながら見送っていただいた。

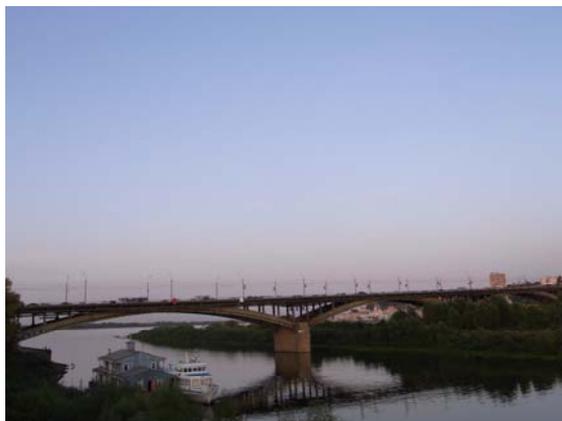
ズナーメンスキー修道院での歓待で、すっかり時間に遅れてしまったわたしたちは、4 時に到着予定だったニジニ・ノヴゴロドへ 7 時過ぎに到着。われわれは、レーニンが労働者を引き連れてなだれ込まんとするホテル「ツェントラーリヌィ」へ突入し、ついでお土産の酢づけのキュウリの瓶をロビーでぶちまけた。そこでは街を案内してくれる予定の、日本語を勉強中の学生、ユーラ、アーニャ、ターニャが辛抱強くわれわれを待っていてくれた。



「手前がレーニン」

9月14日（月）雨のち晴れ

ヴォルガとオカに挟まれた商業の街、ニジニ・ノヴゴロドは現在、ロシアで人口規模第4の大都市である。残念ながらこの町の学界に知り合いを持たなかったわれわれは、市街の案内を地元の旅行会社と、日本センターで学ぶロシア人学生にお願いした。朝10時にわれわれを迎えに来てくれたガイドのウラジーミルさんは、街の活気を体現したような男性であった。バスに乗り込むと天気は残念ながら下り坂に。旅行中初めての雨である。街はオカ川をはさむ形で展開し、その右岸（山の手）に歴史的地区が、左岸に商業地区がおおむね位置している。オカを渡る橋は現在市街中心部に3本あるが、渋滞が大問題となっているため、地下鉄と自動車を通る4本目の橋が2009年中に開通する予定だ（起工は1992年）。



モリトフスキー橋とオカ川

ホテルのすぐ横の定期市の跡を眺めながら、バスは山の手へ。生神女福音（ブラゴヴェシェンスキー）修道院から、塩の豪商ストロガノフが建てた18世紀の生神女誕生教会といった宗教施設を見学。それから「スイス公園」とその中にある、「アフガニスタンとチェチェンで斃れたニジニ・ノヴゴロド兵」のためのモニュメントを見る。インドの専門家によれば、南アジアではアフガン戦争の後、ソ連兵は悪魔のようにみなされたようだが、ここでは天使に抱かれた英雄である。さらにバスは中心部へ。17世紀初頭、ニジニの肉屋クジマ・ミーニンが義勇兵を募り、リトアニア・ポーランド連合軍に占拠されたモスクワをポジャルスキー公と共に解放した。モスクワの赤の広場に両名の有名な像が置かれているが、これは19世紀にニジニの人々のイニシアチブでニジニの街に建てるために作られたもの。それを奪った「罪滅ぼし」に、モスクワ市は同モニュメントのコピーを2005年、ニジニ・ノヴゴロド市に贈ったとのことである。

エクスカッションの間中、ヴォーヴァ氏は正教とニジニ・ノヴゴロドにかける熱い思いを、われわれに機関銃よろしく訴え続けた。われわれが来る前日まで総主教キリールが滞在していたこともあって、街中にキリールのポスターが貼り出されていた。ヴォーヴァ氏曰く「ニジニ・ノヴゴロドは、経済的・文化的・精神的なロシアの中心の一つです。ここには、イスラームもカトリックもユダヤもハーレ・クリシュナも、いろいろな信教が混在している。でも、一番重要なのは…**正教**です」。



「総主教キリルを歓迎する大型ポスター」

兵士のモニュメントの前では、われわれにも祈るように促し、自ら十字を切っていた。彼の信心深さと郷土愛は非常によく伝わってきたのだけど、外国人相手街の見せ方にあまり慣れていないな、というのが一大観光都市ウラジーミルとスズダリを回った後で特に印象に残った感想だ。ペレストロイカまで、この都市は軍需産業の拠点として外国人の通過を禁じた閉鎖都市であった。さらに産業が豊かなおかげで、観光業はニジニ・ノヴゴロドにとってそれほど比重を占めないのだろう。午後には天気も回復し、クレムリン脇の神ヴォルガ河岸通りからヴォルガ十景の一つとも称される景観を眺める。ヴォルガの左岸は沼地ということで、ボルという町のほか一面の森が地平線まで広がっていた。



クレムリン訪問の後の午後は、ヴォーヴァ氏の勧めに従い、昼食をとる間も惜しんでゴーリキー名称文学館へ。ここでは学芸員が「ゴーリキーと世紀転換期のニジニ・ノヴゴロドの文化」、「ロシアの心はロシアの言葉でロシアのナロードを語る」というテーマでエクスカージョンをしてくれた。インド・中国研究者のために、ロシア研究者が通訳を務めていたのだが、ここでは3名の通訳が疲労困憊するほど、長時間かつ多岐にわたる説明があった。



夕方 4 時。ようやく遅い昼食をとり、市内の歩行者天国大パクロフ通りへ。美術展などを見学し、自由時間となった。

カザンへの移動は夜行列車である。ホテルから駅まではそう遠くはないのだが、荷物を抱えた日本人の大集団が列をなして駅へ向かう姿は、どこから見ても鴨の群れがネギを背負っているようにしか見えない。というわけでタクシー分乗にしようと思ったが、人数が多いだけに手間取る。そうこうしているうちに、アーニャがなんと、停車中のバスと話をつけて、貸切にしてしまった。彼女の機転で迅速かつ無事に駅に到着した。アーニャ、ターニャ、ユーラは、勉強や仕事、家事・育児で忙しい中、この日もわれわれを細やかにサポートしてくれた。一日限りの滞在はあっという間で、彼らとの交流は幾分限られたものになってしまったが、彼らの話を伺うのは楽しく、街の中では本当にお世話になった。改めて彼ら 3 人と、快く手助けを請け負っていただいたニジニ・ノヴゴロドの「日本センター」のみなさんにお礼を申し上げる。



「左から、ターニャ、アーニャ」

ロシアの長距離移動といえば汽車、というわけで、この移動手段を選んだのだが、車中の夜もロシア風に楽しく更けていった。

9 月 15 日 (火) 晴れ

早朝 6 時、電車はカザン駅へ到着。天気予報ではこの日は雨、最高気温 7 度。出発直前に調べところでは、旅行の間中雨が曇りで、低気温という予報が出ており、中にはダウン

コートを用意してきた参加者もいたのだが、この日も晴天に恵まれ、気温も 20 度をやや下回るくらいで、かなり快適だった。ダウンコートのお守りが効いている。

午前中は「国立タタールスタン共和国造形美術館」へ。地方の美術館だと高をくくっていたら、案に相違して小さいながらも立派なコレクションをもつ大変魅力的な美術館であった。宗教画は近郊の教会からのものが多いが、それ以降の絵画はカザンの貴族 A.F.リハチョフ(1832-1890)のコレクションをもとにしている。特に目を引いたのが、I.シーシキン(1832-1898)中心とする 19 世紀から 20 世紀初頭の作品である。学芸員は絵画を示しながら、アカデミズム、ロマン主義、印象派と、ロシア美術の歴史と発展を語ってくれた。2 階には V.カンディンスキー(1866-1944)、N.ゴンチャローヴァ(1881-1962)、P.コンチャロフスキー(1876-1956)などのコレクションもあり、存分に楽しむことができた。



午後からは、カザン大学のハティプ・ミンネグーロフ教授によるタタール文学史についての講義を拝聴した。イスラームを通じたペルシア文学の影響から、現在のタタール語の出版物が置かれた状況まで、国家や宗教の問題を含めながらお話しいただいた。タタール文学におけるヴォルガのイメージについての質問などにも、ご丁寧な解説をいただいた。



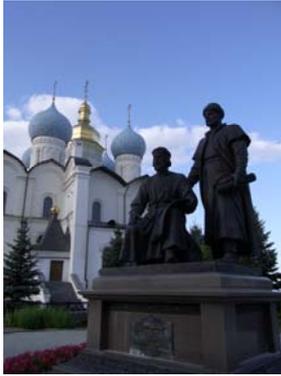
「ミネネグーロフ教授

と」

その後は、カザンに留学中の桜間瑛君の案内で、カザン・クレムリンやバウマン通り、書店などを見学した。タタルスタンの人口の半数以上を占めるタタール人の多数はムスリムであり、それに続くロシア人は正教にシンパシーを感じている。タタルスタン共和国政府は、多様な宗教の平和的共存を特徴の一つとして政策的に打ち出しており、実際そのことは町の雰囲気によくあらわれていたように思う。たとえば、クレムリンでは、2005年のカザン建都 1000 年祭に合わせて竣工された真新しいクル=シャーリフ・モスク（16 世紀のイワン雷帝のカザン征服の際に破壊、おそらく「再建」の意味を含められた「創造された伝統」）が目を引くが、1930 年にソ連政府により破壊された正教の生神女福音聖堂も同年に「再建」されている。



「クル=シャーリフ・モスク」



「生神女福音聖堂」

カザンも人口 100 万を超える大都市であるが、商業がものすごい勢いで発展しているといった風のニジニ・ノヴゴロドとは、ある意味対極的な落ち着いた街であるようにみえた。それはおそらく、ここが 1804 年からの伝統を持つカザン大学を擁する町であることにも起因するように思われた。市内の目抜き通りであるバウマン通りは、人通りも少なく、フランス企業が買い上げた後、交渉がもつれて放置されているというアール・デコ調の美しいホテルの残骸が目立つ。一方で大学周辺は人通りも交通量もより激しく、よく賑わっているようだった。おみやげには、プーチン首相やメドヴェージェフ大統領がイスラーム帽をかぶった肖像を使った小物なども売られていて、おもしろく感じたが、実はソ連時代から民族共和国ではよく使われた手法だという。カザンには大手の出版社もあり、タタール語とロシア語を併記した作品や、モスクワでは手に入りにくい書籍もたくさんあって、夕方、多くの参加者が本漁りにいそしんだ。

#### 9月17日(木)晴れ

穏やかなバービエ・レータ、小春日和で一日がスタートした。われわれは朝からマイクロバスに乗り込んで、カザン郊外の島、スヴィヤシュスクへ。イワン雷帝がカザン侵攻の際に築いた要塞都市であり、その後修道院となった場所である。かつては地続きであったが、1957年にできたクイブィシェフ・ダムによって、町はヴォルガとスヴィヤーガの2つの川に囲まれて水没し、高台のみが島の形で残っている。この日はカザンのガイド、アンゲリーナさんが案内してくださった。まずは、カザンの誇る食品店「バハトレ」（「幸せな」という意味）で、タタール民族料理のピロシキや、蜜菓子チャクチャクなどを昼食用に調達する。桜間くんもアンゲリーナさんもこのものが一番おいしい、市民に大人気、という。



「バハトレ店内の様子」

道中、アンゲリーナさんがしきりに「カザンは東ヨーロッパ最大のムスリム都市」、「これは東ヨーロッパで一番の〇〇」と得意げに説明するのに、違和感を覚えてしまい、「カザンは東ヨーロッパ **Восточная Европа** ですか？」と伺うと、当然と言わんばかり「だって地理学的にはそうでしょう」と返されてしまった。うーん、その「地理学」って…と思ったところで、桜間くんが思い起こさせてくれた。カザンよりさらに東、エカテリンブルグにアジアとヨーロッパを分ける碑があるではないか！話に聞き、絵に見て、知っていたようで、理解していなかった地元人の意識！これぞ旅の醍醐味の一つである。

とわけのわからないことに感動しているうちに、バスは川を渡り、スヴィヤシュスクへ到着した。海岸のような河岸を右手に登りながら急な坂を上り、修道院へ向かう。ここには3つの修道院があり、ソ連時代には精神病院として使用されていたとのこと。イワン雷帝の時代に、ヴォルガ上流の町ウグリチから木材を流して建造した建物が一部に残る建造物は、美しくはあるが、長年の放置の跡がはっきり残っていた。来年にはメドヴェージェフ大統領がここの修復のための予算を組んでくれると約束したという。



スヴィヤーガ川を望む



「ウスペンスキー聖堂内部」

修道院見物を終えたところ、生神女就寝修道院の院長シルアンさんにばったり道端で出くわした。グルジア出身、モスクワで教育を終えた後こちらに来たというシルアン師はとても気さくな方で、アンゲリーナさんがわれわれを紹介してくれると、「イコン描くところ、見たいかね?」とわれわれを工房へ案内してくれた。家庭的な雰囲気の中、イコンに使用する金箔や絵の具、木版など貴重なものをたくさん見せていただき、いろいろなお話もうかがえた。



「突然の出会い」



「アイコン工房」

カザンでは、さらに古本屋をめぐり、さらなる本を求めて町を探索し、大変有意義な一日となった。



「ヴォルガにて」

9月18日(金)晴れ

旅もいよいよ終盤である。われわれは朝の飛行機でカザンを出て一路モスクワへ。モスクワでは常のごとく渋滞に巻き込まれ、ホテルに着いて遅い昼食を済ませるとすでにロシア国立人文大を訪問する時間となっていた。

ここでは、宗教学研究所の副所長であり、准教授であるリュドミーラ・ジューコヴァさんが、レクチャーをしてくださった。ジューコヴァさんは毎年夏に、学生を連れてヴォルガ中流域にフィールド・ワークに出でおり、実は今回スヴィヤシユスクを旅程に組み入れ

たのも、かねてジューコヴァさんから勧められ、ずっと行ってみたいと考えていたからなのであった。

ジューコヴァさんは、ニジニ・ノヴゴロド州とタタルスタンの宗教状況を、統計を用いながら、分かりやすく説明。さらにマイノリティの宗教団体に関しては、フィールドでの調査結果を交えながら、大変興味深くお話ししていただいた。今回の旅程で2つの州と1つの共和国の観光・宗教施設をわれわれはかなりたくさん目にしたわけだが、ジューコヴァさんのレクチャーを拝聴して、それぞれの状況がさらに腑に落ちた。宗教の平和的共存を掲げるタタルスタンと対照的に、現在非常に保守的な主教がつかさどるニジニ・ノヴゴロドは正教的な催しの色合いを強く打ち出しているという。実際そのような雰囲気はわれわれは肌でじかに感じてきたわけだ。



「ジューコヴァさんのプレゼンテーション」

研究会は多いに盛り上がり、たくさんの質問も出て、予定された時間はあっという間に終わってしまった。

そのあとわれわれは、「モスクワに来たのに一度も劇場に足を運ばないなんて!」という、知人のモスクワっ子の勧めに従い、ホテル「コスモス」内の劇場で催される「ナショナル・ダンス・ショー」を見学に行った。この第一部がとりわけ大変強烈な印象で、バレエをアレンジしたダンスでロシア(民族)の歴史の山場を表現するものだった。キー三兄弟、ルーシ洗礼、モンゴル・タタールのくびきなど古代から、ソ連・アバンギャルド、スチリャーガときて、最後には「ロシア」と大書された飛行船が飛んで行った。あまりのことにDVDを衝動買いしてしまった人も。いろいろな意味で、現代のロシアの歴史観を象徴するダンスだと思われた。

9月19日(土) 晴れ

最終日は、モスクワでの資料収集や、実地調査に思い思いに過ごした。最後の夜は、モスクワに留学中の研究者や、ラーニン教授を交え、中華レストランで大いに懇親を深めた。

以上が、今回の旅のあらましである。

にわか添乗員としての感想を一言。今回の旅程を組み立てていくにあたって、ヴォルガ、インド、中国の専門家がみんな楽しくためになるプログラムって、何なんだ？とさまざまなにない知恵をしぼり試行錯誤した。しかし全員無事で、何事もなく楽しいばかりで旅を終えてみれば、旅というものは自然と動き出すのだということを感じた。出かけた先の景色、出会った人々、自分の知識や経験、その日の天気や気分、旅の仲間…こういった一切が混じり合い、一人であったら知られなかったようなものを知り、見られなかったものを見聞きし、多くのものを肌で感じられたと思う。



今回の旅行が、参加した側にも受け入れた側にも、なにか実りをもたらすことを願い、またこのような機会が、さらにすぐれた形で訪れることを願って筆を置く。

文責 新学術領域「比較地域大国論」第6班事務 高橋沙奈美